

令和6年度「防災ラジオドラマ」シナリオコンテスト

優秀賞 「ヘルメットを動かしたいのに」

脚本 藤田 知多佳

登場人物一覧

樫野佐和子(53) 重度の身体障害者 中村英香

樫野 正志(52) 佐和子の夫 村上龍太郎

概要

重度の障害を持つ樫野佐和子が目を覚ますと、ベット隣の本棚の一番上に防災用のヘルメットが置いてあるのが目に入った。ヘルメットは寝ている間に夫の正志が置いたものだが、棚から半分はみ出している。

地震が起きたら、ヘルメットが顔の上に落ちてきてしまうと思った佐和子は、ほんの少しだけ動かすことのできる

指先で鈴を鳴らして隣の部屋の正志を呼んだ。発声することが難しい佐和子は文字盤を使って、

ヘルメットの位置を直すよう正志に訴えるが、思いはなかなか伝わらない。

この件がきっかけとなり、佐和子は防災を意識した部屋づくりにして欲しい、障害のある自分に必要な

防災グッズを備えて欲しいと訴えるが、正志はいざって時はなんとかなるだろうと答える。

それに対して佐和子は、もしもの時のことをキッチンと考えてくれないと不安だと伝え、

今のうちに対策を話し合いたいと訴える。

佐和子M 「目を覚ますと天井の他に、ベッドの隣にある本棚の一番上に、防災用のヘルメットが置いてあるのが目に入った。寝ている間に主人が置いたんだろう。それはいいとして、問題なのは置き方だ。ヘルメットの半分が棚からはみ出ている。こんな地震が起きたら、私の顔の上に落ちてくるじゃないか！ アイツ……訴えてやる！」

小さな鈴を鳴らす音。

佐和子M 「右手の中指に小さな鈴を通したヒモが巻き付けてられている。

私はこの鈴を鳴らして人を呼ぶのだ。

右手の指先はほんの少しだが動かすことが出来る。ただ、こんな小さな鈴の音なんて、隣の部屋でテレビを見ているアイツには届かない。まったく、災害時私はどうやって人を呼べばいいんだ？」

正志 「呼んだかあ？」

佐和子M 「珍しっ！ いつもは10回鳴らしても気付かないのに一回で来るなんて！

でも災害が起った時、こんな風にすぐ気付いてくれるわけがない。緊急時に

どう動くつもりなのか、この人にキチンと聞かないと、おちおち寝てもいられない！

……が、まずは棚の上のヘルメットをなんとかしてもらおうじゃないか」

正志 「イラっと口パクじや何言ってるのか分かんないよ！ ……ホラ、何が言いたんだよ？」

佐和子M 「そう言っって主人は私に介護用の透明な文字盤を見せた。これは透明なアクリル板に

50音と数字を書いたもので、声を発することも、指で文字を指し示すこともできない私は、

ここに書いている文字を視線で指して、言いたいことを看護師さんやヘルパーさんに伝えている。

主人だけはメンドクさがあって、文字盤を使ってまづは私の話を聞くとうとはしない。なぜ、今日は？」

正志 「いびきって時に使えるようになっておいた方がいってナースに言われたから、練習」

佐和子M 「やる気になってくれたのはいいことだ。よし、じゃあ伝えるぞ！ まずはヘルメットのへー！

正志 「ふっ…むっ…ね、か！」

佐和子M 「へだよー！へー！

正志 「ねの次、一二文字目は何？」

佐和子M 「進まないで！ 一文字目はへだよ」

正志 「何怖い顔してんの？ 一文字目、ね、じゃないの？ ……ぬ？ め？
（イラつと）分かるねえなあ、もういい、ヘルパーが来たら伝えて」

佐和子M 「私だって伝わらなくてムカつくよ。でも自分で動くことが出来ないから、アナタに
やってみらわなきゃどうしようもないの。何度だって伝えるから、投げ出さないで聞いて！」

正志 「何だよ、その顔。何か今日しつこくないか？ 何をそんなに訴えているんだよ？」

佐和子M 「ヘルメットと伝えるため、私は何度も文字盤の文字を視線で指した」

正志 「ヘル、メ…ああ、ヘルメット！ これか？ さっき寝ている時に置いたんだよ、
通販で防災グッズ紹介してさ、そういや防災用ヘルメットどこにあったなあつて。
見つけたからソコに置いておいた」

佐和子M 「その硬いヘルメットが私の顔に落ちてきてどうなんですが」

正志 「もしかしてヘルメットが落ちそうだって言いたいのか？ なんだ、それが言いたかったのか。
確かに半分棚からはみ出てるもんな」

佐和子M 「そう言つて主人は棚からはみ出さないようヘルメットをずらした」

正志 「ホラこれでいいだろ？」

佐和子M 「違ーう！ 位置をずらすだけじゃ変わらないでしょ？ 地震の時に落ちてこないように
下に置いてー！ てか、この際棚の上に置いてあるものを見直してー！
棚の物が落ちてきたり、棚が倒れたりしたら私は逃げられない。
声を出して助けを呼ぶことだつてできないんだからー！」

正志 「そこにあれば地震の時にすぐかぶれるだろ？ 俺が頭にかぶせてやるからな」

佐和子M 「かぶつた後どうするの？ 私はどうやって逃げるの？ このベットのままで外に出られないよ」

正志 「それで、お前をおぶつて逃げてやるー！」

佐和子M 「いや危ないでしょ。そうゆう時どうしたらいいのか、看護師さんやヘルパーさんに聞いておいて！」

正志 「そこ窓から外に出ればいいよな。そうだ！ それなら防災用リュックもこの部屋に置いて
おいた方がいいな。イマ持つてくるー！」

佐和子M 「……この部屋を片付けてくれないかな。呼吸器とか吸引器とか、私が使っている医療機器の電源コードがグチャグチャで、よく看護師さんが足に引っかけている。その電源コードたちを差し込んだら足配線も発火しないように気を付けて。窓だって、割れても破片が飛び散らないように飛散防止のフィルムを貼って欲しい。棚も位置を動かせないのなら、倒れないように固定して……ああ、やることはいっぱいあるのに、私の体は動かない」

正志 「ホラ、防災用リュック！ 棚の下に置いておくから！」

佐和子M 「何が入ってるの？」

正志 「何が入ってるの？ つて顔だな。普通だよ。水と非常食とラジオと電池と」

佐和子M 「私のオムツは？ 普通じゃなくて、私に必要なものを入れてよ」

正志 「何か言いたそうだな、よし！ またコレで教えてくれ」

佐和子M 「主人は文字盤を見せた。私に必要なものをすべて伝えるのは大変過ぎる。でも伝えなければ、災害時に避難先で、私を使うものが揃っていることはいらないだろう。まずはタオルだ！ タ、オ、ル！」

正志 「た？ ……お？ タオルか！ おし、文字盤の使い方がダイブ分かって来た。タオルなら入ってるよ。ホラ、3枚もあれば十分だろう。」

佐和子M 「足りない足りない！ タオルは枕や、手や足の下に敷くクッションの代わりに使うし、バスタオルは毛布の代わりになる。もつとたくさん準備して！」

正志 「た、……く、……さ、ん、……い、れ、て……タオルを？ いざって時、そんなに持っていけないよ」

佐和子M 「じゃあ、いざって時の代用品を考えないと」

正志 「タオルなんて避難所で支給されるだろう、なんとかなるって」

佐和子M 「何言ってるの？ 私は災害時に一番の弱者になる。もしもの時のことをあなたがキチンと考えてくれないと不安だよ」

正志 「お前は避難所でも色んなことを優先させてもらえだろっし」

佐和子M 「そんな甘い考え今すぐ捨てて！ たとえ毛布が一番に支給されたとしても、毛布の素材や重さで私は体をすぐに痛めてしまう。自分で毛布をはがすことも、毛布の代わりになるものを準備することもできないのだから、あなたがしっかりしてくれないとー」

正志 「とは言っても、緊急時はいろんな物がないだろうから、その時は我慢しような！」

佐和子M 「我慢することを少しでも減らせるように、今のうちにできることからはじめなきゃ！」

正志 「なんか腹減ったなあ、ラーメンでも茹でるかな」

小さな鈴を鳴らす音。

正志 「なんだよ？ まだ何か言いたいのか？……仕方ねえなあ」

佐和子M 「主人が見せる文字盤に必要なものを全て伝える。オムツ、タオル、おしりふき、マット、アルコール綿、介護用手袋、吸引カテーテル、塗り薬、胃に直接入れる栄養剤、もちろん文字盤も、それから……」

正志 「いい加減にしろよ！ それ全部持っていけるわけないだろう！ 運ぶのは俺だぞ？」

佐和子M 「でも私には必要なモノなの！ こんなもんじゃない、もつとたくさんモノが私にはいるの。だから、何度だってアナタに伝える！」

正志 「はあ、これは災害の時どうするか、考えないといけないな」

佐和子M 「私も一緒に考えるよ。いつもあなたがそばにいてくれるわけじゃない、災害時に助けてくれるとは限らない。だからこそ、もしもの時の対策を話し合いたい。備えておきたいの」

正志 「大地震が起きなければ、それが一番幸せなんだけどなあ」

佐和子M 「大地震が発生したら、文字盤でコミュニケーションをとれる状況ではないかもしれない。今のうちにできることをしておきたい」

正志 「まあ心配し過ぎてもしようがないし、とりあえずラーメンを茹でて」

小さな鈴を鳴らす音。

佐和子M 「先延ばししないで今考えて欲しい」